

# ことばを学ぶ メカニズム

## 認知科学からのアプローチ

今井むつみ  
Imai Mutsumi

### 第4回

## モノはどのように数えるか ① ——可算名詞と不可算名詞

### ✿ 文法によるモノの分類

世界の言語のほとんどは、名詞を文法によって限られた数のカテゴリーに分類している。例えば英語は名詞を可算名詞、不可算名詞に分類し、どのような名詞でも必ず可算名詞か不可算名詞のどちらかに分類される。ドイツ語やフランス語などのヨーロッパ系の言語を学んだことがある人は、これらの言語が名詞を「文法的性」によって分けることを知っているだろう。日本語、韓国語、中国語をはじめとしたアジアの言語の多くは可算、不可算によって名詞を分類することはないし、性による文法もない。代わりに助数詞によって名詞を分類している。

前回では、色の名づけを材料にして、私たちはことば（名前）のフィルターを通して世界を認識し、記憶していると述べた。では文法による名詞の分類は私たちの認識に影響を及ぼすのだろうか？ この問題を今回と次回の2回にわたり、私が行った実験（参考文献参照）を紹介しながら考えていく。さらに次々回（連載第6回）では認識の違いが、私たち日本人が英語を学習するのにどのように影響するのかを考えていきたい。

### ✿ 数えられるか数えられないかによる分類

英語を始めとする多くの言語は、モノを数えられる、数えられないという観点から文法的に分けている。この文法では、本来的にそれぞれが数える単位となっているモノと、それ自体では数える単位を持たないモノ、という基準で名詞を二分す

る。この分類の基準は、上記の性による分類や、助動詞を用いた分類よりもずいぶんわかりやすいものに思われる。人や動物、コップ、本などはみな「数えられるモノ」である。それに対し、水や砂、塩、粉などは「数えられないモノ」だ。

ただし、すべての分類がまったく明快か、というと必ずしもそうではない。可算・不可算文法は、名詞で表される世界のすべてのモノ・すべての概念について、それが目に見えて、実際に数えられるものであるか否かにかかわりなく、「数えられるモノ」「数えられないモノ」という2つの文法カテゴリーのどちらかに分類しなければならない。具体的な実体のない抽象概念も可算のどちらかに分類する。その時、その言語のその概念に対する認識のしかたが色濃く映し出される。例えば“idea”, “concept”, “view”などは可算名詞で、数えるモノとしてみなされている。しかし、“thought”は基本的に不可算名詞である。私たち日本人は「考え」という語が数えられるかどうかなど考えることもないが、英語ではそれぞれの語に対して、それが単独で意味を持つものなのか、集合体として初めて意味をなす概念なのかという概念的な区別をし、それが語の意味に反映されているのである。

### ✿ 日本語は何を基準に名詞を分類するのか

助数詞で名詞を分類している、という感覚を持っている人は少ないのではないかと思う。私たちはモノを数えるときに、「バナナ1本」「リング1個」のように数の後に「本」「個」などの助数詞

をつけるが、これはとどのつまり、助数詞によって名詞を特定の意味のカテゴリーに分類していることになるのである。例えば、「本」は鉛筆、フォーク、キュウリ、バナナ、野球のバット、針金、電線など、細くて長いものを数えるときに用いられる。つまり、「細くて長いもの」というカテゴリーを作っている。他方、「匹」や「頭」という助数詞は、まず、モノが動物かどうかを分類し、動物の仲間をさらに、「大きい動物」と「小さい動物」に分けている。つまり、日本語の助数詞は、動物かそれ以外かという基準で大きく分け、さらに、モノの大まかな形（細長い、平たい、それ以外）、大きさ、機能性など、名詞とは別の意味の基準で概念を切り分けている。

このように、助数詞による名詞の分類と可算・不可算文法は名詞を分類する意味の基準が根本的に違うが、名詞と文法カテゴリーのつながりの強さでも両者は異なっている。可算・不可算文法は、すべてのそれぞれの名詞を最初から可算名詞、不可算名詞のどちらかに分類している。だから英語ではマッシュポテトやスクランブルエッグのようにジャガイモやたまごの1つひとつの区別はもはやなくなってしまって「塊」になってしまっても“mashed potatoes”, “scrambled eggs”のように名詞を複数形にし、もとの名詞が可算名詞であることをちゃんと残しているのである。

それに対して、日本語でバナナを数える時、「一本のバナナ」と「一房のバナナ」「一山のバナナ」というように助数詞を変えることでバナナを数える単位を示す。これはとりもなおさず、「バナナ」というモノの見方が流動的で、名詞の分類は1つの名詞が必ず1つの助数詞カテゴリーに分類されるものではないことがわかる。

### ✿ 物体と物質の存在論的違い

可算・不可算を基準に名詞を分類する英語と助数詞で分類する日本語は、英語話者と日本語話者の世界の見方になんらかの影響を与えているのだろうか？ 実は可算名詞、不可算名詞の区別というのは、概念的には、私たちが思っている以上に大切な区別なのである。なぜかという、ある存在に対して「同じなのは何か」という問題に直接

かかわってくるからである。私たちはあるコップ、例えば陶器のコップと、アルミでできたコップを「同じ種類のモノ」と考える。しかしコップの取っ手や割れてしまったコップのかけらは、コップそのものとは考えない。「コップ」は1個のコップ全体が保たれて「コップ」の存在が成り立つのである。

今度はバターについて考えてみよう。目の前に、四角いバターがある。このバターの隅をちょっと切り取ってみよう。その切り取ったバターのかけらは、もとのバターと同じものか。同じものである。コップの場合とは異なり、バターは、そもそも「バター全体」というものが存在しない。

このようにコップのようなモノと、バターのような物質は、「同じ」という概念自体が異なる。つまり両者は、根本的に性質の異なる存在なのである。これを哲学では「存在論的区別」と呼ぶ。アメリカのクワインという哲学者は、この存在論的区別は英語のように可算名詞・不可算名詞を区別することによってのみ意味をなす区別であり、子どもは名詞の可算・不可算の区別をする文法を習得することによって、この概念を理解できるようになる、と考えた。

すると、日本語のように、可算名詞・不可算名詞を区別しない言語では、モノと物質の本質的な違いを理解できないのだろうか。日本語では、すべての名詞が、数える単位を自分で持たない、英語でいうところの不可算名詞にあたるとしたら、日本語話者は、世界に存在するすべてを「物質の塊」と見るのだろうか。今回はこの「存在論的区別」という問題について、日本語話者と英語話者との違いを調べた実験を手がかりに考えていきたい。

(慶應義塾大学教授)

### ◆参考文献

- Wisniewski, E., Imai, M & Casey, L. (1996). On the equivalence of superordinate concepts. *Cognition*, 60, 269–298.
- Imai, M. & Gentner, D. (1997). A crosslinguistic study on constraints on early word meaning: Linguistic influence vs. universal ontology. *Cognition*, 62, 169–200.